

編集後記

ここで胃粘膜という用語は正常胃粘膜と慢性胃炎とを併せて広義の胃粘膜を意味する。一般的には慢性胃炎という言葉はいささか食傷気味で、なんともとりつくところがないとされている。一方、病理組織学的には正常粘膜とは何か、慢性胃炎とは何か、臨床的病理学にみた正常粘膜と慢性胃炎とは何か等々の多くの問題があるようである。組織学的にみても正常胃粘膜からはどうも発癌しそうなもので、発癌はやはり胃炎のあるところからであるとされている。こんな意味から現時点で再検討することもある意義であろう。

一般的には局在病変の診断はすでに詳細に行われてきたが、病変周辺の診断はあまりひろく行われていなかったのではなかろうか。そこで、さらに眼を広くして考え直そうとする見解もある。

胃粘膜というテーマは「盲人が象の足をさわった」例えのように、終わったわけではなく、一つの一里塚として、さらにまた次の一里塚に向けて歩みつづけなくてはならないことは当然であろう。

この意味から、本巻の巻頭言から最終頁まで一読に充分値する。とくに中村氏の論文は興味深いものである。

1975年の年頭にあって、「胃と腸」の愛読者の諸先生の御健勝と御多幸を心からお祈り申し上げ、御研究の発展を鶴首している次第であります。

<青山 大三>

<編集> 早期胃癌研究会